The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高校における生徒下位文化の諸類型
Author(s)	米川, 英樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1978, 4, p. 183-208
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高校における生徒下位文化の諸類型

米　川　英　樹

高校における生徒下位文化の諸類型

I. 生徒下位文化論をめぐって

1 はじめに

高校進学率が92%を越え，「高校義務化」論が表われる程高校教育は量的に拡大しつつある。このような情勢の中で見落してはならないものは学校の内部における教育内容の問題と共に，生徒層の質的変化である。ユニバーサル化しつつある高校には，必然的に以前より多様な階層・能力・価値志向を伴った生徒層の形成が進行しているのではないだろうか。本論は，このような進学率の上昇と生徒層の分化という趨勢の中で形成されている「生徒下位文化」の諸側面を明らかにしようとするものである。

「生徒（下位）文化」，或いは「学生（下位）文化」は，student subculture，または，student culture の訳として1960年代以降日本でも頻繁に用いられている用語である。日本ではその実証的調査研究はまだ数少ないものであるが，アメリカにおいては Waller, W. の古典的著作 The Socioloy of Teaching[1] 以来，一貫して教育社会学研究者の興味の対象となってきた。しかしながら，この概念はまだ必ずしも定着したものであるとはいえない。理論レベル実証レベルの両面から「生徒下位文化」論を整理し，検討する必要性がある。ここではその両面から「生徒下位文化」を探求することをねらいとしている。最初に「生徒下位文化」論を展開する上での三つの問題点を指摘しておきたい。

第一に，「生徒下位文化」の概念定義の問題である。「下位文化」subculture 概念については，Yinger F. M.[2] が述べるように必ずしも十分に定義されないまま，多くの調査研究で多義的に用いられている。彼は，(1)あらゆる社会に存在する普遍的なある傾向（たとえば Sapir, E.[3] や Cooly C. H.[4] の述べるような，あらゆる文化の底に横たわっている生物学的・社会学的な制約)。(2)言語，価値，宗教，食事，生活様式などの面で，全体社会とは異っている集団の規範体系(逸脱文化)（最も典型的なものは，移民集団に見られるが，友人グループなどの単位の小さい一時的な集団にも用いられる。）(3)或る集団と全体社会の間で葛藤状況がある時，全体社会に対抗する集団の内部に生じる規範（対抗文化）の3つの種類に下位文化の用法例を分析している。「生徒下位文化」の概念は，Yinger の規定を採用すれば，まだかなり未分化な概念といえるが，少なくとも(1)を除いた，「逸脱文化」，「対抗文化」，及び広い意味での「下位文化」からは区別される社会的な「役割」の諸要素が入り混じってい

るように思われる。従来，青年文化論の面から，このような分析枠組が提出されてきたのであるが，青年文化の一翼を担う「生徒下位文化」についてもこのような諸局面があることを考慮に入れるべきであろう。特に「生徒下位文化」については，公的組織内部における下位文化ということで，基本的には社会的な「役割」と連続する面が強いものと思われるが，逸脱文化的なもの，或いは反抗文化的なものが潜在的な形で存在するものと思われる。このように「生徒下位文化」の外延と内包はかなりあいまいであったが，その原因としては以上に述べたような下位文化の概念の不明確さと多義性に負っているようである。

「生徒下位文化」をめぐる第二の問題は，「生徒下位文化」の実在性に関るものである。生徒達は多くの研究で述べられているように[5]，仲間集団での相互作用によって共通の感情，価値観，規範を発達させ，自己をそれに同調させることによって，成人の世界から自律的な独特の文化を創り出そうとする傾向があるかもしれない。しかし反面，生徒達は一定の背景をもって学校に入学する。物質的・道徳的・精神的・感情的な要素は，ある程度入学以前の人生経験や家庭背景によって決定されている。従って Hollingshead, A. B.[6] が Elmtown's Youth で述べたように[6]，結局，入学以前の家庭背景がそのまま生徒の文化的源泉となっているのかもしれない。「生徒下位文化」の自律性の問題をこのような観点から注視していく必要があるだろう[7]。

第三に，「生徒下位文化」を見る視点をめぐる論議が存在する。大きく分けて，「学校文化論」的接近法と「青年文化論」的接近法を掲げることができる。「学校文化論」的接近法は学校を半独立的な組織と考え，学校文化をその役割構造の面で教師文化と生徒文化に分け，二つの下位文化間の葛藤と非連続性を重視する。Waller, W.[8], Lambert, R.[9], King, D.[10], Buxton, C. E.[11] らの著作はこのカテゴリーに入るものと思われる。他方，「青年文化論」的接近法は生徒下位文化を学校を包摂する全体社会の文化体系の下位単位としてみようとし，Coleman, J. S.[12], Clark, C. R. & Trow, M.,[13] Keniston, K.[14] らの著作がその例としてあげられる。白石義郎が述べるように，二つの接近法のうち前者は Teenager roles を，後者は Pupil roles を軽視する傾向があり，両者共分析の枠組が狭いという欠点をもっている[15]。

このような「生徒下位文化」をめぐる論議はまだ端緒についたばかりであるが，徒らに論議を重ねるのではなく，経験的なデータにもとづいた地道な調査研究に基づいた理論化への道が今日ほど望まれる時はない。その際，生徒下位文化論も理想的には Yinger の述べるような「下位文化」概念の厳密さを目指して議論が発展させられることが期待されている。更に「生徒下位文化」の自律性に関しては，他の社会諸集団の文化的特徴との比較においてその実在性が確認されねばならないであろう。このように「生徒下位文化」に対する概念規定の厳密化と経験的な意味での実在性の確認，更に「学校文化論」と「青年文化論」を視野に

入れ，実証研究につながる統合的な理論図式は，今後，調査研究を継続していく中で明らかされるべきものである。本論ではそのような試みを目標としつつ，生徒下位文化を当面，「生徒集団に特有の価値志向と行動様式」と定義する。経験的データの限られた日本においてかなり莫然とした操作的定義をここに置くことは，研究ステップからしてもある程度仕方ないものと思われる。しかし，これを発見的用具として用い，それによって高校生集団の「下位文化」に光を投げかけ投げかけて徐々に理論化への方向を探っていくことは，いかほどかは価値があるものと思われる。ここでは「生徒下位文化」の機能的特徴の考察に続いて，そのパターン及び変化の方向を記述することから出発したい。

2 「生徒下位文化」の機能

生徒下位文化の機能を見るとき，いくつかのレベルに分けてその機能を見ることができる。第一は，「生徒下位文化」がその成員に働く機能の面から見た個人レベルの機能。第二は，学校の組織との関連でみた集団レベルの機能。第三は，生徒集団が全体社会との関連でどのような機能を果たしているかのレベルである。それぞれ，ミクロレベル，ミドルレベル，マクロレベルの機能と呼ぶことにする。

ミクロレベルの機能については次のことがいえよう。ある生徒は特定の集団に入り，そのメンバーシップを得たいと思っているとしよう。彼がまず最初に行なおうとすることは，その集団の規範を受け入れ，その価値観を内在化することによって自己や他人の行動や態度をそれによって判断しようとする。すなわち，「生徒下位文化」はその成員に対して社会化の機能をもつ。ある集団に参加することによる人格変容や生活目標の組織化にまで及ぶ社会化作用の存在は，多くの論者の指摘するところである[12)]。第二に，多くの青年達にとって，青年期は家族から心理的に独立しようとする時期である。この時期にオートノマスな規範をもつと思われる青年文化の一翼を担う「生徒下位文化」は，家族から青年が離脱することを促進するような規範を育てる。分野によっては例外も存在するが様々な価値諸分野に関して家族から仲間へ，準拠集団が徐々に或いは急速に移行する傾向は，このような家族からの離脱＝仲間集団の形成による自律化への歩みを裏づけるものといえよう。特に，学校外での仲間との接触が比較的少ない都市地区では，「生徒下位文化」は重要な意義をもつものと考えられる。第三に，「生徒下位文化」は他の文化型と同様に，成員に心理的な安定を与える。特に学歴が重視される日本社会では，進学競争から取り残されたもの達や反抗的行動を示す主体にとって，一定のサンクションと判断基準を提供する仲間集団の下位文化の存在は，一定の慰めを与え，勇気を鼓舞する源泉としての機能を果たすものと思われる。

次にミドルレベルの諸機能をみることにする。「生徒下位文化」は，基本的には社会化機能を果たすことを期待されている学校に対して，それを促進したり阻害したりする下位機

能を果たすものと思われる。たとえば教師に対する否定的評価や集団的な反抗は，潜在的或いは顕在的に学校の社会化機能を阻害する働きをもつし，逆に達成志向の高い生徒下位文化の存在は教師の授業を助ける働きをもっている。更に，多くの教師達の語るところによればカリキュラムの質と量及びその編成にも「生徒下位文化」を考慮に入れて行なわれるという。「生徒下位文化」は学校組織の目標である生徒の社会化に対して，ある種のフィードバック装置の役割をもつのである。第二に，「生徒下位文化」は「統制機能」とでも呼ぶべき働きをもつ。これは学校の組織秩序に対する生徒達の集団的な反抗や学校運営や行事に対する積極的な発言の中に見られるものである。つまり，学校組織の運営や秩序維持に対して何らかの働きかけを行なうように，ばらばらな生徒を組織し目標達成へと駆りたてる機能である。たとえば長髪の禁止，制服の規定など学校規則に対する集団的異議申し立ては「生徒下位文化」と教師文化の対立を浮彫りにすると共に，彼らの学校運営に対する影響力を顕在化しようとするものである。逆に学校は，生徒会などを通じてこの機能をある程度是認することによって，生徒下位文化の「統制機能」をうまく利用することもある。

最後に，「生徒下位文化」のもつマクロレベルの機能を考察したい。学歴が大きな社会的意味をもつ日本の社会では，学業成績という特殊な業績によって社会的に勢力をもつ層とそうでない層に分化し固定化していく傾向がある。このような将来に対する見通しは，学年の進行と共に明らかになっていく。すでにある程度選抜が行なわれた高校段階では，進学校に入学することに成功した層は，ますます勉学志向が強くなる傾向があるのに対して，成功しなかった層には，苛立ちと不満が渦巻いているものと思われる。生徒下位文化は，成功した層には勉学重視価値志向を，失敗したものにはそれに代わる享楽志向を代表とする価値志向を強めることによって，結果的に人材の社会配分にともなう摩擦を減じ，野心を冷却するいわゆるクーリングアウトをうまく行なう機能を果たす。個人的な意味では失敗者層に対して安らぎを与える生徒下位文化も，社会的には社会の人材配分を補助するというジレンマをもつ。マクロレベルにおける「生徒下位文化」の第二の機能は，全体社会の価値・規範に対置されるべき新しい価値・規範を生成し発展させることによって，新しい人間の行動様式や対抗的イデオロギーを生み出す土壌の役割を果たすことである。全体社会で受け入れられている価値・規範は，家族や仲間集団など様々な伝達媒介を通じて個人の内面に達するものと考えられる。全体社会の価値・規範とは必ずしも同一でない「生徒下位文化」は，個人の発達という縦断的な側面からも，また社会の他の諸部分との関連の面からも全体社会のもつ文化にある程度の影響力を保持する。少なくともその可能性をもつものと考えることができるであろう。これは特に，旧制高等学校や活動家大学生の間にしばしば見られるものであるが，現代の高校レベルでもその萌芽は存在しているように思われる。

3　日本における「生徒下位文化」

さて，上記のような機能をもつと思われる「生徒下位文化」は，実際にどのように捉えられるのであろうか。例えば，柴野は[13]，Coleman, J. S., Clark, B. R., Clark, C. R. & Trow, M., Matza, D., Keniston, K. らアメリカの諸研究の比較によって，生徒下位文化の型を次のように，まじめ型，平凡型，非行型，脱落型に整理している。

生徒下位文化の型〔柴野，1972〕

	Coleman, J. S.	Clark, B. R.	Clark & Trow	Matza, D.	Keniston, K.
まじめ型	Brilliant	Academic	Academic Vocational	—	Activist
平凡型	Athletic Most popular	Fun	Collegiate	—	—
非行型	—	Delinquent	Nonconformist	Delinquent Radicalism	Alienated
脱落型	—	—	—	Bohemianisn	Under-achiever

出典　麻生誠編「教育社会学」東大出版 1974 p. 183

しかしながら，社会構造や全体文化の違った日本社会においては，独自の調査研究による生徒下位文化のタイプを探る必要がある。この意味で野村（1967）[18]，松本（1969）[19]，武内（1971）[20]，大阪府（1974）[21]らの調査は貴重である。このうち，高校生を対象とした本格的な調査としては野村調査をあげるべきだろう。彼は大阪における進学ランクによってランクづけられた7つの学校（主として普通科）を対象とする調査の中で，生徒層の意識は全体として強く学校格差と関連していることを見い出した。そして生徒の価値志向は，(1)進歩的な意味で成人文化に反発し，自律的に新しい価値を見い出そうとする内部志向型，(2)成人の規範にかなり積極的に適応する伝統志向型，(3)成人の規範に反抗するが，娯楽や流行に敏感で，マスレジャーに振りまわされる外部志向型享楽型，(4)親や学校の示す規範と享楽的文化への欲求のジレンマにさらされ，生活態度が分裂している不適応な型，以上4つの型に分かれると報告している。

本研究はこの野村調査を視野に入れ，「生徒下位文化」の多変量解析によるパターン化と野村調査と比較する形で生徒下位文化の時系列的変化を明らかにすることを主要目的とする。

Ⅱ　現代の都市高校生の生徒下位文化
——調査の結果と分析——

1．調査課題

前章で述べたように，ここで取り上げられる調査課題は，

(1)　高校生の「生徒下位文化」は，どのような類型枠組を析出することが可能か。

(2) 高校生の「生徒下位文化」は，どのように変化しつつあるか。

の2点である。これらを調査するために，次の二つの事に考慮を払った。第一に，できるだけ統一的な分析軸を用いて「生徒下位文化」に接近すること。このために分析手法としては主成分分析を用いた。また，高校生の意識面ばかりでなく，学校生活を中心とする活動をも重視した質問項目を用いることにした。第二に，質問紙の一部として前述の野村調査と全く同じ質問項目を用いて比較を可能し，時代的な変化の方向性を見い出すことを心掛けた。

2. 調査の方法と対象

様々な高校の「生徒下位文化」を分析するため，(1)進学校―非進学校を3ランクに分け，(2)公立校―私立校を共に含むように，また(3)普通科ばかりでなく，職業科をも調査対象にすることにした。まず学校のランク分けのために，昭和49年11月に行なわれたE社の模擬テストの平均偏差値を用い，進学校，中間校，非進学校（順に，A，B，Cランクと呼ぶことにする。）に，大阪の高等学校計214校を振り分けた。

表1　学校分類（昭和49年度E社模擬試験）

	Aランク	Bランク	Cランク	計
（平均偏差値）	～59	58～48	47～	
公立普通科	24.7% (22校)	46.1% (41校)	29.2% (26校)	100.0% (87校)
公立商・工業科	0.0% (0校)	10.3% (4校)	89.7% (35校)	100.0% (39校)
私立高校	4.8% (4校)	19.3% (16校)	75.9% (63校)	100.0% (83校)
国立普通科・工専	100.0% (3校)	0.0% (0校)	0.0% (0校)	100.0% (3校)
計	13.6% (29校)	28.5% (61校)	57.9% (124校)	100.0% (214校)

A，B，Cのランク分け基準は野村哲也氏の学校分類に見合ったものとし，多少それに修正を加えた[22]。

そして，公立普通科に関しては各ランクから一校づつ，公立職業科に関しては，商業高校（Cランク）と工業高校（Cランク）各1校，私立高校については大半が普通科であるので，男子校（Bランク），女子校（Cランク），共学校（Bランク）を一校選択し，各校4クラスづつ，主としてホームルームの時間を割いて調査を行なった。有効サンプル数は1305で，学校別，男女別分類は，表2で示すとおりである。また，対象校の一般的な特徴を表3で示しておく。

表2　学校別男女別サンプル数

学校＼姓	男	女	計
A（公立普通科Aランク）	76	70	146
B_1（公立普通科Bランク）	74	78	152
B_2（私立共学普通科Bランク）	120	49	169
B_3（私立男子普通科Bランク）	177	0	177
C_1（公立普通科Cランク）	60	105	165
C_2（私立女子普通科Cランク）	0	176	176
C_3（公立商業科Cランク）	32	139	171
C_4（公立工業科Cランク）	146	3	149
計	685	620	1,305

表3　対象校の特徴

学校＼特徴	父親が管理職のもの(順位)	父親が大学卒のもの(順位)	就職希望および進路未定者の比率		学校種類および一般的特徴
A	1	1	(男子) 6.6%	(女子) 10.1%	公立普通科，名門進学校
B_1	4	4	18.1%	29.9%	公立普通科，典型的な公立校
B_2	2	2	15.0%	16.3%	私立共学普通科，中学，大学をもち中高一貫教育
B_3	2	3	23.3%	——	私立男子普通科，中学併設
C_1	7	6	68.0%	71.8%	公立普通科，様々な地域問題を抱える
C_2	5	5	——	48.9%	私立女子普通科，短大併設典型的な私立女子校
C_3	8	8	80.3%	97.7%	公立商業科，女子が多い
C_4	6	7	70.5%	(少数のため除く)	公立工業科，男子の数が圧倒的

3.　調査結果

(一)　生徒下位文化の諸側面

前章で，生徒下位文化を「生徒集団に特有の価値志向と行動様式」と定義した。実際の調査では，(a)学習への動機と学習状態，(b)雑談の内容，(c)将来の生活目標，(d)学校生活空間での活動，を中心に分析することにする。このうち，(a)，(b)，(c)は意図的に野村調査と質問項目を同じにし，後での比較対照を可能ならしめた。これで全ての「下位文化」内容を網羅する訳ではないが，かなりの程度「下位文化」に接近できるだろうと考えた訳である。以下①主成分分析とクロス集計による生徒下位文化の分析，②野村調査との比較による生徒下位文化の変化，を順に明らかにしよう。

(二)　主成分分析による生徒下位文化の分析

まず，多面的な高校生の生徒下位文化を統合的にとらえるために，生徒の学校での活動を示す18の項目を用意し，主成分分析の手法を用いて個々の項目への反応の中に存在する潜在

的な構造を明らかにしたい。活動に焦点をしぼったのは，生徒のもつ潜在的な価値志向が活性化された形で活動の中に表わされると思われたからである[23]。これによって生徒下位文化の分析軸を析出しようというのである。

前章で示したように，日米の実証的研究の成果を踏まえて，できるだけ多様な活動を表わす質問群を作成した。これに対する反応を主成分分析によって解析し，更にバリマックス回転を行なって得られたのが表4である。

表4　バリマックス回転後の因子負荷行列

		勉学志向	娯楽交友志向	社会活動志向	脱集団志向
1	部活動	.0161	−.0016	.0447	−.7822
2	ホームルーム活動	.1450	.0749	.4453	−.5781
3	自発的勉強	.6682	.0151	.2600	−.0524
4	社会運動参加	.1185	.0930	.6325	−.2166
5	授業勉強	.7434	−.1421	.0863	.0021
6	社交重視	.3685	.6787	−.0205	−.2057
7	友だちづきあい	.3829	.6436	−.2174	−.1974
8	先生の学識	.7078	.0231	.1724	−.1161
9	クラス行事活動	.2941	.2071	.3770	−.5403
10	趣味や娯楽	−.2039	.5233	.2518	.1748
11	学校生活をエンジョイ	−.1987	.6221	−.1156	−.2191
12	しかたなく通う	−.5373	.0800	.0790	.3301
13	上下関係重視	.1149	.3021	−.0247	−.7055
14	職業上の知識獲得	.4624	.1590	.0559	−.1091
15	生徒会活動	.0952	.0483	.5849	−.4374
16	入試勉強	.4740	−.1255	.3920	.1464
17	異性とのつきあい	−.0979	.5947	.2796	−.0451
18	書物を通して思索	.1895	.0024	.6763	.0711

因子寄与率　51.1196%

但し，上記の項目は，次のような質問群を表わしたものである。

(1) 部活動を活発におこなっている。

(2) ホームルームの委員になって活動を熱心にしている。

(3) 興味ある科目の勉強は自分でどんどん進めていく。

(4) 社会の矛盾を人々に訴え運動している。

(5) 授業中は熱心に勉強する。

(6) 友達とできるだけ交わり社会能力を身につける。

(7) 友達とつき合うことが楽しくそれを大切に思う。

(8) 先生のもっている学識を得ることに努力している。

(9) クラスのために文化祭などの行事の計画をすすんでひきうける。

(10) 趣味や娯楽に大きな時間をさいている。

(11) 勉強は適当にして学校生活をエンジョイする。

(12) 高校卒の学歴がなければ困るので，仕方なく高校に通っている。

(13) 先輩や後輩とのつき合いを大切にしている。

(14) 職業に役立つ技術や知識を得るために勉強している。

(15) 生徒会で学生生活の改善に努力している。

(16) 入試のために勉強することをこころがけている。

(17) 異性の人とのつき合いに積極的である。

(18) 哲学や文学思想の本を読み思索にふける。

主成分分析で，固有値が1以上の基準で分析を行なった結果，回転後の第1軸には「授業勉強」，「先生の学識」，「自発的勉強」，「入試勉強」，「職業上の知識獲得」の項目の順に高い正の負荷量をもち，「仕方なく通う」にやや高い負の負荷量をもっている。これは Clark, B.[24] のいう academic subculture に相当するもので，「勉学志向」と命名した。次に，「社交重視」，「友達づきあい」，「学校生活をエンジョイ」，「異性とのつき合い」，「趣味や娯楽」の項目の順に高い正の負荷量をもつ第2軸が析出され，fun subculture 的な性格が強い。これを「娯楽交友志向」と名づけた。第3軸には，「書物を通じて思索」，「社会運動参加」，「生徒会活動」の項目が表われ，まじめに思索しつつ社会矛盾を人々に訴えるという，Clark & Trow[25] のいう non-conformist にあてはまる因子が出てきた。これを，「社会活動志向」とすることにした。第4軸には「部活動」，「上下関係重視」，「ホームルーム活動」，「クラス行事活動」の項目で順に，負の高い負荷量を示し，正の負荷量が高いものは，「仕方なく通う」の項目であった。これは，集団活動に参加しない無気力で消極的な層を表わす「脱集団志向」の因子とした。これらの分析軸は，ある意味で，「生徒下位文化」の「理念型」として考えるべきものであり，個々の生徒はその4つのうちのどれかに分類されるというものではない。

この分析軸を中心として他の項目をも含んだ形で分析を続けるために，全サンプルについて4つの軸に対応する4種の主成分得点を計算した。表5は，男女別学校別の主成分得点の平均値と標準偏差を示すものである。

Aランク校については男女共，強い「勉学志向」，反「脱集団志向」が目立ち，やや強い「娯楽交友志向」が見られる。「社会活動志向」については，男子はやや高い平均値を示すのに対し，女子はマイナス値を示している。Bランク校については，一般に「勉学志向」に関し，男子よりも女子の方が同程度かやや低い得点を示しているが，「娯楽交友志向」についてはこれと全く逆で，女子の方が男子よりも高得点であり，友人づきあい及び趣味や娯楽に対する関心が高いことを示している。しかしながら，男女共，「娯楽交友志向」はAランク校に比較すれば高い数値を示すが，Cランク校よりもその傾向は弱いといえるだろう。「社会活動志向」については，B_1 校を除けば男子についてはかなり活発な傾向があり，積

表5　男女別学校別因子得点

男　子

学校＼因子	勉学志向	娯楽―交友志向	社会活動志向	脱集団志向
A	0.318 (0.97)	−0.263 (1.09)	0.353 (0.97)	−0.600 (0.93)
B_1	0.063 (0.97)	−0.157 (0.98)	0.014 (0.90)	0.246 (1.00)
B_2	0.003 (1.30)	−0.150 (1.07)	0.476 (1.05)	−0.033 (1.15)
B_3	0.052 (1.13)	−0.188 (1.08)	0.279 (1.01)	0.321 (1.04)
C_1	−0.440 (0.71)	−0.065 (1.09)	0.121 (1.00)	0.320 (0.95)
C_3	−0.531 (0.93)	0.319 (1.04)	−0.178 (1.08)	−0.393 (1.00)
C_4	−0.263 (1.02)	0.095 (1.09)	0.102 (0.95)	0.189 (0.88)

女　子

学校＼因子	勉学志向	娯楽―交友志向	社会活動志向	脱集団志向
A	0.450 (0.90)	−0.172 (0.92)	−0.139 (0.94)	−0.635 (0.83)
B_1	−0.180 (0.94)	−0.004 (1.00)	−0.274 (0.85)	0.028 (1.11)
B_2	−0.182 (1.19)	0.038 (0.92)	0.101 (1.14)	−0.057 (1.08)
C_1	0.075 (0.67)	0.090 (0.90)	−0.221 (0.99)	0.239 (0.81)
C_2	0.114 (0.91)	0.227 (0.83)	−0.184 (0.95)	−0.043 (0.90)
C_3	−0.069 (0.84)	0.147 (0.87)	−0.494 (0.75)	−0.224 (0.91)

極的にクラス活動や学校外の運動にまで参加するものが多いことを示している。B_2校，B_3校は共に私立高で，特に社会活動志向の強いB_2校については，学内活動活発化への学校の強力な指針があるという。私立高の独自性がこのような点で生きていることは，今後の高校問題を考える上で興味深い。「脱集団志向」については，B_2校を除いてかなり高い数値を他のBランク校で示している。「社会活動志向」と「脱集団志向」に関して，数学的には独立したものではあるが，学校クラスターを導入したとき反比例的な関係があるように思われる。しかしながら，たとえばB_3校で見られるように，両方共高い数値を示す生徒層も存在し，これは学校内で，活発な学生層と非活発でクラブやクラスにも冷淡な層と両極に分解した二種類の支配的学生層が存在することを示唆し，進学中位高校の性格を物語っているように思われる。Cランク校については，「勉学志向」に関して，男子は明らかにAランク校やBランク校とは距たりがありその志向は弱いようである。女子については，それほど「勉学志向」は強くない傾向を示している。しかし，男子が学校ランクの順に強→弱に志向が変わっているのに対し，女子ではBランク校よりもCランク校の方がむしろ「勉学志向」が強いという。必ずしも一定したパターンは形成されていない。「娯楽―交友志向」については，男女共他のランクの学校よりも高い数値を示し，人間関係や趣味に彼らの関心が強いことを表わしている。また「社会活動志向」については，男女共それ程強い志向性を示してはいないが，この傾向は女子では特に著しい。「社会活動志向」のみについて述べれば，学校ランクよりもむしろ性差がそれを大きく規定する要因になっているようである。また「脱集団志

向」については，男子の数が比較的少なくて同性間の緊密な関連が強い商業高校を除いて，一般に男子については学校のクラスやクラブ及び学外での活動にも消極的な層が多いことがわかる。女性については，比較的強い志向から弱い志向まで存在するため一概に要約することはできないが，同じ学校内では男女共共通した傾向を示すことから，学校の方針や校風，生徒間の連帯性の程度を如実に物語っているとも言えるだろう。

以上をもう少し一般的な形で述べると，進学校においては勉学を重視する生徒が多く，彼らは同時に学校内外の活動にも積極的に取り組む「目的志向型」の生徒層といえるだろう。他方，非進学校では娯楽や趣味あるいは友人とのつき合いに強い志向性をもつが，勉学にはそれほど関心はなく，学校内外の諸活動にもそれ程積極的でない生徒が比較的多く見られる。学歴偏重の社会という日本の特異な社会の中で，生徒達は様々な層に分化していく。その分化の契機は，やはりそれぞれの学校がどのような社会的選抜装置として働くかに関っている。このことは，次に示す「将来の生活目標」の項目についても言えることである。

以上，「生徒下位文化」 の類型枠組を構成する一つの手がかりとして生徒の学校内活動を主成分分析で解析してきた。ここで二つの点で注意が喚起されねばならない。第一に，「勉学志向」「娯楽交友志向」「社会活動志向」「脱集団志向」の4つの枠組は互いに独立性を保った分析軸であり，決して生徒個人の類型ではない。強いて個人の類型を確定しようとするならば4次元空間での個人の相対的位置を主成分得点の推定によって行なうことになろう。しかしここでの主要な研究目的は「生徒下位文化」分析枠の提出と生徒層の分化の実態把握であるためそれに限定した訳である。第二に，「生徒下位文化」の更に深い理解を得るためにはここで提出された枠組と他の項目との関連をみる必要がある。学校内活動に限定された分析軸を，次に示すように生徒の一般的価値観をとらえる「将来の生活目標」に対比することはこの目的に役立つであろう。

㈢ 将来の生活目標

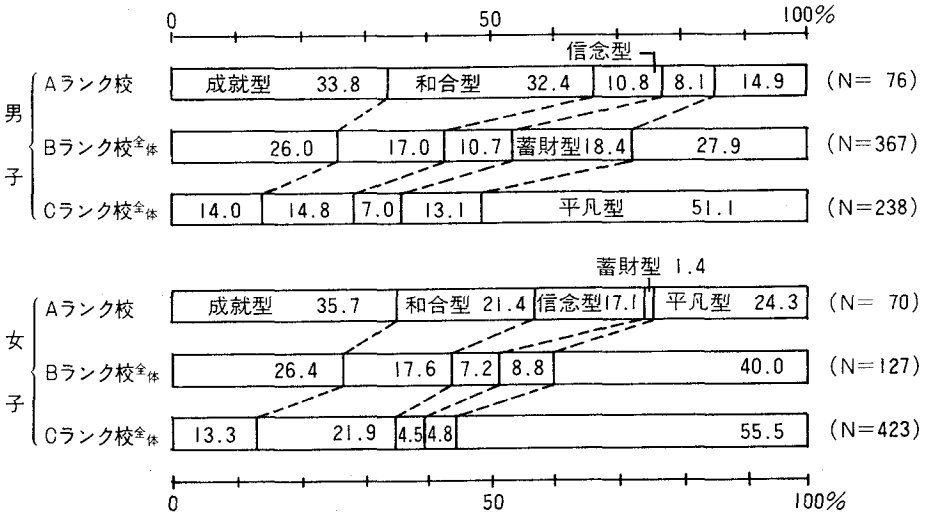
価値志向をみるとき時間的な視点を取り込んだ形で把える必要がある。表6のように，各校によってかなり将来希望する生活が違うことは注目すべきである。男女別進学ランク別に再整理してみると，図1のように明らかに学校の進学ランクと将来の生活目標とが関連していることがわかる。全体としてみると，平凡型が圧倒的に支配的な傾向を示し，次に成就型と和合型がほぼ同じ割合で入り，信念型が8.0％で最も低かった。A・B・Cの各ランクに相当する学校をまとめて信念型を比較すると，各ランクで顕著な差異がみられる。男女別進学ランク別にみると，男女共Aランク校では成就型が最も高い頻度で表われており，Cランク校では平凡型の生活目標を抱いているものが過半数を占める。Bランク校はその中間で，平凡型と成就型の生活目標をもつものの数はAランク校とCランク校の間に位置する。女子ではどのランクでも平凡型の目標をもつものが多いという特色が表われている。

表6　将来の生活目標（単位は%）

		成就型	和合型	信念型	蓄財型	平凡型	計	
男子	A	33.8	32.4	10.8	8.1	14.9	100.0	χ^2=85.868 1%の危険率で有意
	B_1	23.9	16.9	14.1	9.9	35.2	100.0	
	B_2	33.6	20.2	7.6	19.3	19.3	100.0	
	B_3	21.7	14.9	11.4	21.1	30.9	100.0	
	C_1	11.7	11.7	10.0	10.0	56.7	100.0	
	C_2	—	—	—	—	—	—	
	C_3	18.8	21.9	3.1	3.1	53.1	100.0	
	C_4	13.9	14.6	6.6	16.8	48.2	100.0	
女子	A	35.7	21.4	17.1	1.4	24.3	100.0	χ^2=84.040 1%の危険率で有意
	B_1	26.3	18.4	6.6	5.3	43.4	100.0	
	B_2	26.5	16.3	8.2	14.3	34.7	100.0	
	B_3	—	—	—	—	—	—	
	C_1	7.6	21.9	3.8	3.8	62.9	100.0	
	C_2	20.2	23.7	6.9	2.9	46.2	100.0	
	C_3	8.6	20.1	2.2	7.9	61.2	100.0	
	C_4	—	—	—	—	—	—	

但し，それぞれの型は下の項目を示す。
成就型――自分の仕事に関してひとかどのものになりたい。
和合型――町や職場で人から親しまれ，尊敬される人間になりたい。
信念型――主義や信念等，心のよりどころがあるのが第1だ。
蓄財型――出世したい，金持ちになりたい。
平凡型――平凡で安定した家庭があれば十分だ。

図1　将来の生活目標（性×A・B・Cランク）



もっとも支配的な型を各学校ランクから拾うと，Aランク校では<目的追求型>の人生を歩もうとする人間像が浮かびあがる。他方，Cランク校の生徒は生きがいを家庭に求めるものが大半で，仕事場で他から抜きん出たものや皆から尊敬される者になりたいと思うものは少数派であり，ひたすら<平凡で安定した>家庭生活を望んでいる。<目的追求型>に対して<安定生活型>とでも呼ばれるものがこのランクの学校の生徒の顕著な特徴である。前者が<競争原理>の真只中で他から抜きんでた<社会的自我>を追求しようとするのに対して，後者は<個人的生活>を楽しもうとする傾向があり，<競争原理>を重視していないし，また重視したくない将来の生活を望んでいると思われる。Bランク校においてはこれらのタイプが同じくらいの頻度で現われ，主として二つの人間像に分裂しているように思われる。この結果は明らかに先に見た主成分得点による分析を裏づけている。さて，生徒の価値志向をもう少し深く掘り下げていこう。学校内での活動を対象として，「生徒下位文化」の一側面を主成分分析で示したが，これに現われた志向性は，もう少し一般的な生活意識とどのように関連しているのであろうか。この関連を調べるために個人の主成分得点を上位⅓，中位⅓，下位⅓に操作的に分割して，「将来の生活目標」とのクロス集計を試みた。

表7～表10はその結果である。人生観の各項目を100％にした時に，4つの志向の上位，中位，下位はどのように位置づくのかを見たのである。その結果次のような関連のあることがわかった。

表7～10　将来の生活目標と主成分得点の関連

表7		成就型	和合型	信念型	蓄財型	平凡型
勉学志向	上位	46.1	49.0	41.7	31.1	32.0
	中位	24.3	30.1	26.2	25.2	32.6
	下位	29.6	20.9	32.1	43.7	35.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

単位：(％)，$\chi^2=42.027$，1％の危険率で有意

表8		成就型	和合型	信念型	蓄財型	平凡型
娯楽・交友志向	上位	31.8	45.0	28.2	45.9	39.9
	中位	29.2	28.1	35.0	27.4	27.7
	下位	39.0	26.9	36.8	26.7	32.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

単位：(％)，$\chi^2=20.284$，1％の危険率で有意

表9		成就型	和合型	信念型	蓄財型	平凡型
社会活動志向	上位	46.8	40.6	59.2	44.4	32.8
	中位	28.5	28.1	20.4	34.1	32.4
	下位	24.7	31.3	20.4	21.5	34.8
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

単位：(％)，$\chi^2=38.649$，1％の危険率で有意

表10

		成就型	和合型	信念型	蓄財型	平凡型
脱集団志向	上　位	37.8	28.5	37.9	52.6	39.4
	中　位	27.0	29.8	26.2	25.2	29.9
	下　位	35.2	42.2	35.9	22.2	30.7
	合　計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

単位：(%)，$\chi^2=27.415$，1%の危険率で有意

各型については表6参照

(1) 成就型の生活目標をもっているものは「勉学志向」が強く，「娯楽交友志向」が弱く，「社会活動志向」が高い傾向があり「脱集団志向」との関連はあまり表われなかった。

(2) 和合型の生活目標をもつものは「勉学志向」が強く，「娯楽交友志向」「社会活動志向」も共に強く，「脱集団志向」が弱い。

(3) 信念型の生活目標をもつものは，「勉学志向」が強く，「娯楽交友志向」が弱く，「社会活動志向」が非常に強く，「脱集団志向」にはあまり差が見られなかった。

(4) 蓄財型の生活目標をもつものは，「勉強志向」が低く，「娯楽交友志向」「社会活動志向」「脱集団志向」は共に強い。

(5) 平凡型の生活目標をもつものは，「勉学志向」「娯楽交友志向」「社会活動志向」ではあまり差がなく，「脱集団志向」が強い。

これらを簡単に示すために，「勉学志向」「娯楽交友志向」「社会活動志向」「脱集団志向」のそれぞれの上位を（＋），中位を（○），下位を（－）で表わすと，

	勉学志向	娯楽交友志向	社会活動志向	脱集団志向
成就型	＋	－	＋	○
和合型	＋	＋	＋	－
信念型	＋	－	＋	○
蓄財型	－	＋	＋	＋
平凡型	○	○	○	＋

ここで成就型と信念型が主成分分析による価値志向に関しては同じになったが，これは個人の時間的社会的視野を含む将来の生活目標は，現在自分がかかわりをもつ活動を分析した結果，析出された学校生活空間での活動志向に関しては同じ結果が出る可能性があることを示している。つまり，将来の目標はちがっても現在の学校生活に関しては全く同じ志向性を持つということである。しかしながらこれらの表をχ^2検定した結果，すべてのものが1%の危険水準で有意な差がでており，かなりの程度主成分得点で表わされた志向性と将来の生活目標とは明確な関連をもつことが示された。そしてこのことは「生徒下位文化」なるものが，統計的に見た場合現在の学校生活に関する価値・規範を示すのみならず，将来の個々人の人

生と強い関りをもっていることを示唆しているのではないだろうか。

㈣　生徒下位文化の変化

本調査のねらいのひとつは，「生徒下位文化」が時と共に変化してきたかどうかを調べることである。この種の調査はあまり行なわれていない。また，学校差を考慮した調査研究はわずかに野村氏のものが目立つ程度である。したがって，この目的のためにわれわれはいくつかの項目について野村調査の項目をそのまま採用してそれらの間の比較を試みた。われわれは野村の行なった質問紙調査のうち，主要な三つの質問項目について比較すべく質問紙を作成している。それらは次のとおりである。

(a)　学習への動機と学習状態

(b)　友人との雑談内容

(c)　将来の生活目標

われわれの調査では，より多様な学校を対象とした結果，調査8校のうち野村調査と比較可能なものは5校であった。(表11参照)

表11　野村調査と本調査の対象校の比較

	Aランク	Bランク	Cランク		
			公立校	私立女子校	工業科
本調査（昭和50年）	1	1	1	1	1
野村調査（昭和42年）	2	1	2	1	1

（注22参照）

(1)　学習への動機と学習状態に関して

まず男女別に学習への動機と学習状態をみることにしよう。現在の高校生と以前の高校生の違いはどこにあるのだろうか。男子について表12をみると，項目④「スポーツや娯楽に気がむいて殆んど（勉強）していない」があらゆるランクの高校で増加しているのが目立つ。また項目③「入試や成績のことがあるので仕方なく」がAランク校を除いてはすべての学校でパーセンテージが明らかに減少し，また項目⑤「しなければならないと思うが，テレビをみたりして余りしていない」が特にCランク校で増加している。そしてまた，「平均勉強時間」と「平均テレビ視聴時間」について，ABランク校ではほとんど変化はないが，Cランク校での変化が大きい。つまり公立普通科においては，勉強が平均2.25時間から1.1時間に半減し，テレビ視聴時間が平均2.25時間から3.6時間へと大幅に増加している。公立工業科においてもそれぞれ1.4時間から1.0時間へ，2.8時間から3.4時間へと変化している。これらの変化は男子校全般についてみると，Aランク校を除いて「娯楽志向型」とでもいうべき傾向が増大しつつあり，これは特に進学ランクが低い学校において顕著である。また勉強

時間の減少とテレビ視聴時間の増加もAランク校を除けば全体的な傾向として明らかにあらわれてきており，「勉学志向」の減少と「娯楽交友志向」の増大がこの8年間にあらわれた変化といえるだろう。

女子についても，Cランク校で項目④が全体的な傾向として増加しており，項目③が減少していることは，男子と同様な傾向である。また，項目⑤については，Aランク校では減少しておりCランク校では目立って増加している。実際に，「勉強時間」と「テレビ視聴時間」ではAランク校では前者は以前とほとんど変わらず，後者も少し減っているくらいであるが，逆にBランク校の公立普通科では，前者が減少し，後者は大幅に増加していることが表12より明らかである。また私立女子校についてはほとんど変化していない。女子に関しても，Aランクを除いて「娯楽交友志向」が増加し，「勉学志向」が減少しているといえるようである。

表12　学習への動機と学習態度

	男子								項目	女子							
〈野村調査〉	a_1	a_2	$*_1$	b_1	c_1	c_2	$*_2$	c_4		a_1	a_2	$*_3$	b_1	c_1	c_2	$*_4$	c_3
	26	17	21.5	8	7	5	6.0	5	①	16	7	11.5	8	4	2	3.0	5
	25	35	30.0	21	23	20	21.5	18	②	15	21	18.0	20	15	12	13.5	17
	8	18	14.5	23	22	20	21.0	15	③	4	18	11.0	11	26	17	21.5	21
	4	2	3.0	5	5	8	6.5	6	④	5	3	4.0	1	2	7	4.5	2
	32	27	29.5	42	41	47	44.0	52	⑤	53	50	51.5	56	51	60	55.5	54
	3.3	2.6	2.95	2.4	2.4	2.1	2.25	1.4	Ⓛ	2.6	2.6	2.6	2.5	2.2	1.7	1.95	1.6
	1.6	1.8	1.7	2.7	2.2	2.3	2.25	2.8	Ⓣ	1.6	1.8	1.7	2.0	2.0	2.2	2.1	2.7
〈今回の調査〉			A	B_1			C_1	C_4	項目			A	B_1			C_1	C_2
			20.3	2.8			3.4	3.5	①			14.3	0.0			1.0	3.5
			16.2	18.3			8.6	18.4	②			21.4	14.5			8.7	10.4
			14.9	19.7			8.6	5.7	③			14.3	13.2			4.9	11.0
			20.3	14.1			17.2	13.5	④			17.1	11.8			11.7	14.5
			28.4	45.1			62.1	58.9	⑤			32.9	60.5			73.8	60.7
			2.5	2.0			1.1	1.0	Ⓛ			2.8	2.1			1.3	1.8
			1.7	2.4			3.6	3.4	Ⓣ			1.2	2.3			3.3	2.5

（項目）① 勉強は大事だし興味もあるから。
② 将来のことを考えれば必要だと思うから。
③ 入試や成績のことがあるので仕方なく。
④ スポーツや娯楽に気がむいて，殆んどしていない。
⑤ しなければならないと思うが，テレビをみたりして余りしていない。
Ⓛ…平均学習時間（単位＝時間）
Ⓣ…平均テレビ聴視時間（単位＝時間）

（注）C_3は私立女子　（注）(*) は左2項の平均。（同ランクの学校平均）
（注）$*_1$とA，b_1と B_1，$*_2$ と C_1，c_4 と C_4，$*_3$ と A，b_1 と B_1，$*_4$ と C_1，c_3 と C_3 は互いに対応する。
（注）①～⑤の項目の単位は%，LとTの単位は時間

男女を総合してみると，現代の高校生は全般的に学校の勉強に対する姿勢が変化してきているように思われる。それらは次のようにまとめることができる。

1) 「スポーツや娯楽などに気が向いて殆んどしていない」という傾向があらゆる学校層で増加しているが，このことはやはり，「娯楽志向」が増加しつつあることを物語るように思われる。

2) 学習への動機と学習状態に関しては，全体として，Aランク校については男女共以前とあまり変わっていないが，Bランク校については「勉学志向」が減少し，かわって「娯楽交友志向」が増加しているように思われる。つまり学校差の拡大が進行しつつあるのではないだろうか。進学校は以前とあまり変わらないが，非進学校についてはあらゆる面で「娯楽交友志向」がこの8年間に大幅に増え，「勉強は適当にして学校生活をエンジョイする」傾向が支配的になってきたことを明らかに示しているといえる。

(2) 友人との雑談内容について

野村調査においては本調査で行なったような多変量解析による「生徒下位文化」分析軸の析出を行なう目的をもっていなかったので，厳密な意味での「下位文化」の比較は困難である。しかし，この点に関しては，野村調査における「価値風土」をみるための「雑談の内容」への高校生の回答を今回の調査の同項目と比較することによって便宜的に「生徒下位文化」の変化を垣間見ることにしよう。全体の傾向と各々の学校の傾向を1位から5位まで示すと表13にみられるとおりである。

全体としての傾向は表14の矢印で示したとおりで，「将来の夢や希望」に関する話題，「勉強や入試」に関する話題が減少してきており，「異性のこと」「学校や家での出来事」「テレビ・映画の内容」についての話題が比較的多くなっている。先に，「勉学志向」の減少と「娯楽交友志向」の増大がみられた「学習の動機と学習状態」に関する項目と同じ傾向を示しているもののように思われる。

各ランク毎，学校別にみてみよう。Aランク校と私立女子高を除くすべての学校で「勉強や入試」に関する話題の順位が下ってきていることは注目すべきことで，これは特にCランクの公立高校において今回の調査では話題の順位では五位までにもはいっておらず，話題の内容が大きく変ってきていることを表わしている。表13は比較可能な学校の間での話題の順位を示している。まずAランク校では勉強や入試のことが第1位の話題であることに変わりはないが，第2位，第3位の話題については，「将来の夢や希望」に関する話題と「家や学校での出来事」が以前と比べてその比重を減少させ，かわって，異性に関する話題が浮かび上っている。またBランク校に関しては，異性に関しての話題が第1位を占めているのは以前と同じだが，「テレビや映画」の話題の順位がどの学校についても以前よりも上がり，か

表13　友人との雑談内容（学校別）

＜野村調査＞

	1位	2位	3位	4位	5位
a_1	勉強や入試	夢や希望	学校や家での出来事	文学・思想・社会	異性
a_2				テレビ・映画	歌手・スター・スポーツ
b_1	異性		勉強や入試		
c_1		学校や家での出来事		夢や希望	テレビ・スター・映画
c_2		夢や希望	学校や家での出来事	歌手・スター・スポーツ	勉強や入試
c_3			歌手・スター	テレビ・映画	学校や家での出来事
c_4	夢や希望	学校や家での出来事	異性		勉強や入試

＜今回の調査＞

	1位	2位	3位	4位	5位
A	勉強や入試	異性	将来の夢や希望	学校や家での出来事	テレビ・映画
B_1	異性	テレビ・映画	学校や家での出来事	勉強や入試	歌手・スター・スポーツ
C_1				夢や希望	
C_3			歌手・スター・スポーツ		勉強や入試
C_4			学校や家での出来事		歌手・スター・スポーツ

表14　友人との雑談内容（平均順位）

	野村調査 各校平均順位	野村調査 全体	今回の調査 各校平均順位	今回の調査 全体	時代の変化
将来の夢や希望	2.1	1	4.2	3	↘
歌手，スター，スポーツ	5.3	6	6.7	6	→
勉強や入試	3.0	3	5.7	5	↘
異性のこと	2.2	2	1.7	1	↗
学校や家での出来事	5.2	5	4.7	4	↗
テレビ，映画の内容	4.9	4	3.7	2	↗
文学，思想，社会問題	6.4	7	7.0	7	→

わって，「夢や希望」の順位が下がっていることが目につく。

現代の高校生は，以前のように自分自身の将来の夢や希望を話題にのせることが少くなってきており，かわって，「与えられた」ものとしてのテレビや映画の内容について話すことが多くなってきた。このことは，現場の教師達がよくいう「無気力，無関心，無責任」の三無主義が多くの若者の心を支配し，より娯楽志向的な傾向が強くなりつつあることを示しているように思われる。そして若者全体としては，何でも「適当に」やりこなし，ある程度課

せられたものさえやれば，後は勉強しないでテレビにかじりつく傾向がみられるようである。これはある意味では，「受験や勉強」に対する緊張が強かった以前の高校生に比べると人間的になったといえるのかもしれないが，反面，それはより「管理された若者」を作り出し，以前ほど自律的な若者が少なくなってきていることを示している。テレビやラジオによる「視聴覚文化」が若者の心を把えていて，それが自分達自身の「擬似若者文化」とでもいうべき意識をかたちづくっている傾向は，想像以上に広範に広がりつつあると思われる。われわれはひとまずこれについての価値判断を避けて，更に現代の高校生の「下位文化」を生活目標の面でとらえていこうと思う。

(3) 将来の生活目標について

生活目標についても今まで述べてきたのと同様の変化が目につく。図2から図6は各ランク毎の生きがいの変化をまとめたものである。これをみると男子についてはどのランクの学校においても「成就型」の生活目標が以前とくらべて極端にその割合が減っているが，反対にどのランクの学校においても「平凡型」の選択率が前回よりも増加している。ところが女子に関しては「平凡型」の生活目標が少し増加した程度で，昭和42年度の調査とほとんど変化がない。さらに，昭和42年度調査と今回の調査における男女差については，今回の方が前回とくらべて差が小さくなってきているのが目立つ。

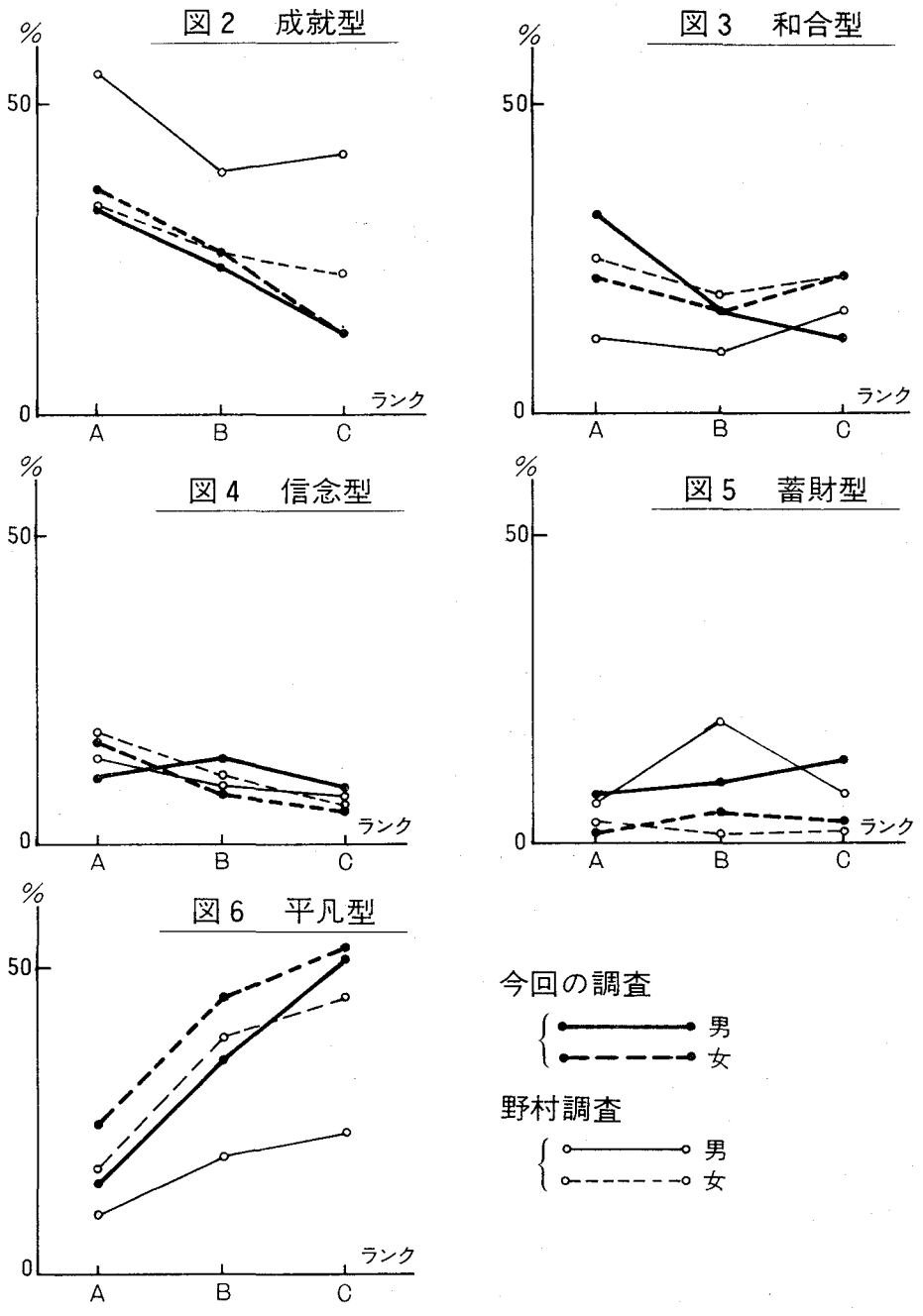
また学校ランク毎のグラフをみると，次のような傾向がみられる。すなわち，生活目標に関しては男子に時代的な変化がおきており，それは「成就型」から「平凡型」への移行とみられる。このことは，多くの「生きがい調査」[26] で家庭を重んじるタイプが以前にくらべて多くなっていることと照らし合わせて考えると，単に高校生だけにかぎらず，全体としての社会意識が社会的な志向から個人的な志向へと移行しているように思われ，全体の社会意識の変化を現代の青年は敏感に反映して，「平凡型」へと移行してきているのである。

しかしながら，われわれは一応現代の高校生に限って考察を進めていこう。

われわれの調査データは以上述べたような3つの質問項目すべてにわたって明らかに時代的な変化を示している。これらは全体として，「生徒下位文化」にはより「娯楽交友志」的な要素が増大していることを示している。特にテレビ・ラジオなどは「擬似青年文化」的な傾向を強めるのに大きな働きをしているであろう。これらをまとめると，

1) 全体の傾向として「娯楽交友志向」が増加し，「勉学志向」が後退している。

2) 進学校においては依然として「勉学志向」の傾向が根強く，その学校の支配的な「下位文化」である点で時代的な変化はみられない。しかしながら，非進学校においては「娯楽交友志向」が強くなる傾向がみられ，割とリラックスした生徒像が主たる傾向として浮かび上ってくる。従って，生徒の意識は以前よりもかえって学校差が顕著になっ



ていく傾向があるように思われる。

3)　生活目標に関しては，全体社会の社会意識を反映しているように思われ，「成就型」

が減少し，家庭を生きがいとする「平凡型」が増加しつつある。

さて，このように野村調査との比較で「生徒下位文化」の諸側面の変化を探ったのであるが，そのような時代的な差を生み出してくる原因はどこに求められるであろうか。このデータからは直接その解答を出すことはできない。

表15　中学からの高校進学率（単位：%）

	全　国	大　阪	S43	76.8	84.5	S47	87.2	92.6
S40	69.6	76.4	44	79.4	89.9	48	89.4	93.2
41	72.3	79.3	45	82.1	89.2	49	90.8	93.4
42	74.5	82.3	46	85.0	91.6	50	91.9	95.2

（「学校基本調査」文部省）

しかしながら，表15で示される急激な進学率の変化は幾つかの示唆を我々に与える。「生徒下位文化」の時代的な変化をもたらす第一の原因は，高校進学率上昇に伴う生徒出身階層の多様化であろう。この背景にはやはり社会全体の経済的繁栄による進学期待の増大と進学の条件が整備されてきたことを忘れることはできない。低所得階層出身の生徒の増加は必然的に，彼らのもつ価値・規範・行動が，もともと中産階級的性格の強い「下位文化」にインパクトを与え，それを徐々に変容させてきた可能性がある。第二の原因は第一の原因と関連したものである。すなわち，必ずしも能力に恵まれたとは言い難い生徒層までが高校に入学することによって，「勉学志向」が弱まり，特に非進学校では「娯楽交友志向」が強まったことをあげなければならないだろう。「準義務化」された高校では，「ただなんとなく学校へ通う」生徒達が多くなることはある程度予想されることである。低い社会階層出身の人々が非進学校に行く傾向が強いことは，表2が示す学校ランクと父親の学歴および職業との強い関連で明らかである。従って上記の原因と思われる二つの要因は今のところ相互関連的で不分離であり，低階層の人々の下位文化のインパクトが「生徒下位文化」の変容をもたらしたものか，あるいは相対的な知的能力の水準低下が影響したものかは，俄かに判断することはできない。しかしながら，進学校ではあまり「下位文化」に変化がみられないのに非進学校では大きく変わっているという結果は，この二つの要因が関連しているものと思われるのである。第三の原因として「擬似青年文化」とでも言うべきマスコミの影響をあげるべきだろう。現代の高校生は以前よりもテレビ視聴時間が長くなったことは先にみたとおりであるが，雑談の内容などにもその影響はあらわれているようで，人格形成の途上にある高校生に与えるマスコミの影響は意外と大きなものなのかもしれない。更にマスコミ自体が意図的に青年達を動員しようとして，「生徒下位文化」や「青年文化」を意識した共通の話題を供給する仕組みになっているように思われる。このことが「生徒下位文化」変化の原因なのか，それ

とも結果なのかは今後の研究に待つところが大きい。第四に「生徒下位文化」の時代的変化をもたらす最も大きな原因と思われる全体社会・文化の時代的変化をあげなければならないだろう。「生徒下位文化」といえども，トータルな文化の一下位部門を形成するものである限り，全体的な変化に逆行するようなことは不可能であろう。多くの「生きがい」調査[26]の示すように，戦後一貫して，社会に対する使命感や出世意識が平凡な生き方や趣味に合ったくらしを望む意識に道を譲り，強い目的志向に裏うちされた生き方からより個人的で，ある意味では人間らしい生き方に変化しつつある。「生徒下位文化」もこの例外であるようには思われない。むしろ，それはこのような全体社会の文化的変化の先頭に立って変化しつつあるのかもしれない。

ま と め

大阪府の8校を対象とする「生徒下位文化」調査で明らかになったことは次のとおりである。

1) 主成分分析による解析の結果，「生徒下位文化」の分析軸として①勉学志向，②娯楽交友志向，③社会活動志向，④脱集団志向が析出された。
2) 各軸に対する主成分得点の分析の結果，進学校と非進学校とでは違った「下位文化」が存在するものと思われる。すなわち，進学校では一般に「勉学志向」「社会活動志向」が強く，「娯楽交友志向」「脱集団志向」は弱い。非進学校ではおおむねこの逆の傾向がみられた。
3) 女子は男子に比べ「娯楽交友志向」が強く「社会活動志向」は弱い。
4) これらの活動志向は「下位文化」の一側面をよくあらわすものと思われる。将来の生活目標とこの分析軸とが密接な関連をもち，成就型，和合型，信念型，蓄財型は4つの分析軸の絡み合わせで理解できることからも，それは明らかである。
5) 「生徒下位文化」の変化と野村調査との比較で把えたとき，進学率の上昇に伴って「下位文化」の分極化が進んできたように思われる。これは進学校と非進学校の差が，「勉学志向」「娯楽交友志向」の両面で拡がってきたことからもあきらかであろう。

「高校義務化」論が喧伝される程，高校への進学機会が拡がった今日，生徒層の分極化と全体としての「娯楽交友志向」の増加，更にマスコミの影響は当面弱まるものとは思われない。このことは，組織としての学校が生徒に期待する教育内容や価値・規範体系の内面化が今後ますます困難になっていく傾向を示しているように思われる。このような趨勢の中で，「社会活動志向」や「脱集団志向」など必ずしも変化が大きくない諸側面に関しての質的な変容をも明らかにしていくことが，今後の「生徒下位文化」の方向性と高校教育へのインパ

クトを考慮する上で，今後重要な課題であると思われる。

---

1) Waller, W., The Sociology of Teachig, John Wiley and Sons 1932, pp. 103-188
2) Yinger, J. Milton, "Contraculture and Subculture", Amerlcan Sociological Review, Vol. 25 (Oct. 1960) pp. 625-635
3) Sapir, Edward., "Persorality" in, Encyclopedia of the Social Sciences, New York: Macmillan, 1931, Vol. 12 p. 86
4) Cooley, C. H., Human Nature and the Social Order, revised edition. New York : Scribner, 1922
5) 例えば Coleman, J. S., The Adolescent Society, The Free Press, 1961, pp. 11-57
6) Hollingshead, A. B., Elmtown's Youth, pp. 439-453
7) これと似た観点から Hargreaves, D. H., Interpersonal Relations and Education, Routledge & Kegan Paul, 1972, pp. 337-372 は，下表のような三つのタイプの準拠状況を考察した。すなわち仲間と両親を対比的に把え，それぞれのもつ価値・規範に肯定的にコミットするか否定的にコミットするかによって三つのタイプの志向を分離した。そして，青年達の間では問題別に準拠パターンが違っているとする。即ち髪の毛の長さや服装など，趣味や外見に関することは，仲間志向になる傾向が強い。一方，道徳的な問題や進路や恋人の選択など長期的な問題については，多くは折衷型であり，少数の者は両親志向型となる傾向がみられるとしている。

準拠対象 / 志向型	両　親	仲間集団
Aタイプ（仲間志向）	否定的準拠	肯定的準拠
Bタイプ（両親志向）	肯定的準拠	否定的準拠
Cタイプ（折衷志向）	肯定的準拠	肯定的準拠

8) Waller, W., op. cit.
9) Lambert, R., Bullock, R., and Millham, S., "The Informal Social System" in Brown, R. (ed), Knowledge, Education and Cultural Change, Tavistock Publications, 1973, pp. 297-316
10) King, R., School Organization and Pupil Involvement, Routledge & Kegan Paul, 1973
11) Buxton, C. E., Adolescents in School, Yale University Press, 1973
12) Waller, W., op. cit
13) Clark, C. R., and Trow, M., "The Organizational Context," in Newcomb, T. M, and Wilson, E. K., Colledge Peer Groups, Aldine Publishing Company, 1966, pp. 17-70
14) Keniston, K., "Faces In the Lecture Room", Yale Alumni Magazine, 1966, pp. 20-34
15) 白石義郎「『生徒のサブ・カルチャー』再考」，日本教育社会学会編，教育社会学研究31，1976，pp. 153-162
16) 例えば柴野昌山「青年文化の虚像と実像」，日本教育社会学会編，『教育社会学の展開』東洋館出版社，1972，pp. 46-51
17) 柴野昌山「学校の逆機能」教育社会学研究 27，1972，pp. 51-64
18) 野村哲也「都市高校生の生活態度と価値観」，教育社会学研究22，1968，pp. 70-88
19) 松本良夫「低い進路志望と反抗的就学態度」，教育社会学研究24，pp. 45-61
20) 武内清「生徒文化と成績」，日本教育社会学会第23回発表要旨集録，1971，pp. 243-248
21) 大阪府科学教育センター，「後期中等教育の編成に関する基礎的研究10」，1974
同「後期中等教育の編成に関する基礎的研究11」，1975
22) 野村氏による学校区分は各高校の大学進学者数を基準にして分類したものである。本論では，大阪府が学区制の再編成をされた関係もあって，E社の模擬テストを資料として用いた。そして，公立普通科高校の進学者数による序列づけの比率に対応する平均偏差値を基準に，今回の高校ランクを決定した。
23) 見田宗介『価値意識の理論』弘文堂，1966，pp. 73-78を参照。
24) Clark, B. R., Educating The Expert Society, Chandler Publishing Company, 1962, pp. 208-209
25) Clark, C. R. and Trow, M., op. cit., pp. 23-24
26) 例えば統計数理研究所国民性調査委員会『第3日本人の国民性』，至誠堂，1975，pp. 187-203
27) データーの統計処理はすべて大阪大学大型計算機センターの NEAC-2200 によって行なった。

STUDENT SUBCULTURES AMONG URBAN HIGH SCHOOLS

HIDEKI YONEKAWA

This paper aims to clarify the patterns of student subcultures at 8 high schools in Osaka. Questionaires were delivered to 1305 high school students in September 1975 and 4 main subcultures were identified. Some of the findings were compared with a previous study in order to shed some light on the transformation of student subcultures.

In the first part of the analysis we found 4 axes through which student subcultures were to be understood, using the method of principal component analysis. The rotated axes showed 4 orientations. They were (1) academic orientation (2) fun-friendship orientation (3) social-activity orientation (4) non-conforming otientation. Factor score was calculated for each respondent along each axis in order to find the dominant patterns of student subcultures at the 8 different schools. The findings were as follows. (1) High schools with higher social prestige got high mean scores along the axes of "academic" orientation and "social-activity" orientation, while high schools with lower social prestige got high mean scores along the axes of "fun-friendship" orientation and "non-conforming" orientation. (2) Female students, when compared with male students, were more strongly directed toward "fun-friendship" orientation and less strongly directed toward "social-activity" orientation.

In the second part of the analysis we compared our data with the Nomura data (1967), and tried to find some trends of student subcultures in recent years. The findings showed a trend of polarization of student subcultures which might be due to the ever increasing enrollment rate into high schools. This trend was especially strong in "academic" and "fun" orientations between the prestige high schools and non-prestige ones. On the whole, rise of "fun" subculture could be identified in all the high schools in our research.